



市立恵那病院での特定ケア看護師の役割と活動

市立恵那病院 特定ケア看護師 伊藤香奈美

チーム医療で恵那の暮らしに寄り添う

私が働いている市立恵那病院は岐阜県恵那市にある20の診療科を有する二次救急医療機関です。病棟は一般床が144床、回復期リハビリ病棟を51床有しており、地域医療を担う中核病院に位置しています。「私たちは地域住民のために、質の高い、思いやりあふれる地域包括医療を展開いたします」という基本理念のもとに、医師をはじめ看護師や各コメディカルでチーム医療の連携を行っています。2017年からは産婦人科が本格稼働し、産院のなかった恵那市でたくさんの産声を聞くようになりました。

2人目の特定ケア看護師

私はこの市立恵那病院で2人目となる特定ケア看護師として、2018年度JADECOM-NDC研修を修了し、2019年度に1年間の臨床研修に行ってきました。今まで、血液内科、小児科、内科で勤務を行ってきたため、臨床研修とともに外科病棟へ移動となり、臨床推論も外科看護も覚えることとなり、勉強することばかりでした。特定ケア看護師の研修に参加した理由は、日ごろ看護を行う中で、患者さんが疑問に思うことに応えるにはどうしたらよいか、納得して治療を行っているのか、他に方法はないのかなどを考えるうちに自分には圧倒的に知識がないことを痛感していたためです。そのため、自分が勉強したいことを当時の師長に相談したところ、1期生の先輩の活動やこの研修のことを教えていただき、特定ケア看護師を目指すことを決めました。

2020年度からの活動については、「特定ケア看護師の病棟での役割・ニーズを探りながら、働き方を確立していくこと」を目標に業務を行っていく予定です。当院は、医師不足のなかで日々、患者さんへの医療・サービス向上のために看護師が状態の把握、処置、診療の補助を行っています。医師不足はもちろんのこと、看護師不足もあり、今以上に看護師一人ひとりのアセスメント力、判断力が求められています。「あれ、なんか変だな」「ちょっといつもと違う気がする」「この薬はこのまま使っていいのかな」「患者さんの訴えにどこまで寄り添えるのかな」と思っても、忙しい医師にいつ報告・相談しようかと不安・負担に思うことが増えています。その際に、特定ケア看護師として病棟にいることでタイムリーに一緒に患者さんを診て、一緒にアセスメントをし、一緒に今この患者さんに何が必要かを考えることができます。必要と感じれば、自分が医師と看護師の間に入り、橋渡しをすることで看護師の不安・負担の軽減につながり、その結果、患者さん・家族に適したケアの提供ができると考えています。また、その成功体験、やりがいを看護師に実感してもらうことで看護力の向上、ケアの質の向上につなげていけるのではないかと考えています。

活動の方向性

私は、特定ケア看護師ではありますが、看護経験も積んでいきたいと考え、2020年度から「病棟を守るための特定ケア看護師の働き方を探すために、あえてメンバーとして病棟に入り、臨



医師を交えた病棟看護師とのカンファレンス

床推論の視点を持って患者を受け持つことで、急変のリスクのある病棟患者のスクリーニングをかけつつ、病棟看護師の負担軽減を図る」ことを目的に、現場の意見を聞きながら臨機応変に活動していきたいと思っています。

1年間の臨床研修を通じて

NDC研修センターを修了後、2019年度は内科・外科・手術室・外来・救急外来を医師の指導のもとで研修させていただきました。当院は前述したように1期生の特定ケア看護師が活躍しています。そのため、医師・看護師共に研修への協力や受け入れは良好で研修自体は大きな問題

もなくスタートが切れたと感じています。しかし、私の活動の仕方ともう一人の特定ケア看護師の活動の仕方に相違があると、なかなか理解を得ることが難しい場面がありました。特定ケア看護師の活動の幅が広がるほど、「何をする看護師なのか」という現場のスタッフの混乱が大きく、理解を得ることが難しくなります。そのため、複数の特定ケア看護師はそれぞれ何を目的としているのか、地域・施設のニーズはどこなのかをしっかりと話し合う必要があると感じました。医療従事者への特定ケア看護師の周知はだんだん進んできています。その中で自分の働き方を確立していければと思っています。

自分の看護の先に患者さんへの安全・安心なケアの提供ができることを目標に、1期生の先輩と切磋琢磨していきたいと思っています。

